

離島活性化の取組み

— 平戸市大島村 —

はじめに

平戸市の北部に位置する^{あづち}的山大島。正しくは大島であるが、全国に数多い「大島」と区別するため、平戸市の大島は通称名で呼称されることがほとんどである（本編においてもこの通称名を用いる）。かつて『長崎県北松浦郡大島村』という県内唯一の村自治体であったが、いわゆる“平成の大合併”により、2005年10月に同郡生月町・田平町とともに近隣の平戸市と合併し、平戸市の一部となった。

全国各地で行われている地域振興策が行政主導で行われていることが多いなか、ここの的山大島では近年、島民自らが率先して地域の特徴を生かした独自の地域おこしを推進しており、行政がそれに追随する形となっている。今回は、島民が発足させた地域活性化団体の活動を中心に、的山大島における地域おこしの現状についてまとめた。

I. 的山大島の概況

的山大島は長崎県の西北端、平戸島から海上15kmの位置にあり、周囲38km、東西約8km、南北約4km。総面積は15.5km²で、山がちな地形のため平坦地は少ない。対馬暖流の影響を受け年間平均気温は16℃。夏季には南から、冬季には北西から強い季節風が吹く。島内にはこの季節風を利用した風力発電用の風車が16基設置されており、その年間総発電量は約7,500万kWhと、離島における風力発電施設としては日本最大級を誇る。



的山大島位置図（案内リーフレットより）

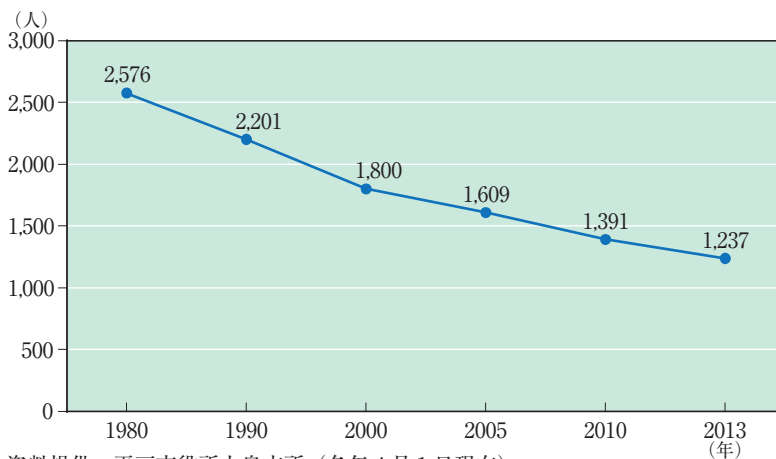
島は室町時代に遣明船の寄港地として栄え、松浦党の一族である大島氏の根拠地であった。近世に入ると平戸藩が大島政務役として招請した木曾氏（井元と改姓）^{いのもと}が治めるようになり、島に

捕鯨による繁栄をもたらした。以降、明治期の1889年4月には的山村と大島村が合併して大島村となり、1989年には村制100周年を迎えた。

島へのアクセスは、平戸港との間にカーフェリーが1日5便就航しており、所要時間は約40分。

基幹産業である農漁業も減少し、1次産業以外の雇用の場が少ない島を離れて他地域に職を求める人が後を絶たず、1980年に2,500人を超えていた人口は2013年4月現在、1,200人台と半数以下にまで激減している【図表1】。

図表1 的山大島の人口



資料提供：平戸市役所大島支所（各年4月1日現在）

Ⅱ. あづち大島たからものの会

人口減に歯止めがかからない的山大島では、島の活性化のために島外から人を呼び込むための取組みが行われており、その中心となって活動している組織が「あづち大島たからものの会」（会長：丸田圭介氏）である。

1. 発足経緯

島の集落には、北側に農漁業の中心地で人口が集中している大根坂地区おおねざか、南側に旧村役場（現：平戸市役所大島支所）がある神浦地区こうのうら、そして西側には最もフェリーの発着回数が多く島の玄関口となっている的山地区、他に前平、西宇戸地区がある。このうち、他地域にはない的山大島独



大根坂地区全景



神浦地区全景

特の地域資源「神浦地区に残る捕鯨で栄えた町並み」^{*}を利活用するため、島民自らがこの歴史的町並みの価値について学ぼうと勉強会をはじめたのがきっかけとなり、2004年2月に有志により発足したのが「あづち大島たからもの会」（会員数10人）である。

※神浦地区に残る捕鯨で栄えた町並み

神浦集落は江戸時代初期に形成された漁村集落を起源とし、三代政務役・井元弥七^{やしちぎ えもんよし}左衛門義信^{のぶ}が鯨組を創業し、海岸を埋め立てて屋敷や工場を建設したことを契機に発展した。鯨組の廃業後は海側にも新たな町家が築かれ、漁業と商工業を中心とした港町へと発展を遂げ、現在目にするのできる江戸中期から昭和前期までの「町家」と呼ばれる木造平入り^{注1}の家屋が途切れることなく建ち並んだ町並みが形成されている。

注1) 建物のどの面に正面出入口があるかによって分類される様式の1つ。平入りは建物の各面の呼び名として長辺側、あるいは屋根の棟と平行な面「平」^{ひら}の側に出入口がある建物のこと。道路からは屋根の軒側から入る形式となり、道路に対して圧迫感がない町並みを形づくる。

神浦地区に戦後の高度経済成長によって失われてしまった日本の伝統的町並みが残っていることは以前から知られていたが、それについての評価の動きは近年になってからである。まず、2004年に長崎県のまちづくり景観資産に登録され、次いで2005年度から2年間にわたり文化庁の補助事業として伝統的建造物群保存対策調査に着手し「中世末期から近世初頭にかけて成立した漁村集落が、鯨組の創業と廃業を経て近世の港町へと発展し、江戸中期から明治期に建てられた建物が数多く残され、離島の港町の景観を色濃く伝えている」との高評価を得た。この調査結果等を受け、住民の同意集約を経て、2007年度に平戸市が伝統的建造物群保存条例を制定、翌2008年に全国で83番目となる重要伝統的建造物群保存地区（略称「重伝建」）。長崎県内では他に長崎市の東山手・南山手の両地区、雲仙市^{こうじろくうじ}の神代小路の3箇所が選定されている）に選定された。



神浦の町並み

2. 組織の広がり

あづち大島たからもんの会は、同会が発足した同年12月に福岡の「NPO法人文化財匠塾」（2009年に発足した「^{さくじくみ}作事組全国協議会」＝町家の維持・保存活動を行う職方^{注2}の全国相互支援組織＝に加入）にも会員4名が参加し、町家解体の保留など、歴史的町並みの維持・再生に取組み始めた。同時に町並みを生かした地域の活性化活動の公益性を確保するため、2008年5月に「NPO法人文化財匠塾平戸支部」を併設（支部長は丸田氏が兼務）して助成事業の受け皿とした。

注2）建築関係などで特定の技術を持っている職人。

次いで2009年、神浦の町並み再生の基盤として、特定物件家屋の所有者56人の加入による住民組織「神浦町並み保存会」（会長は「たからもんの会」メンバーでもある井元伸治氏）を発起、地元住民が自分たちの町並みを守り再生することに対し、団結していくという体制が発足した。また、2011年には町家の保存修理にあたる技術者集団として「あづち大島重伝建作事組」が設立された。

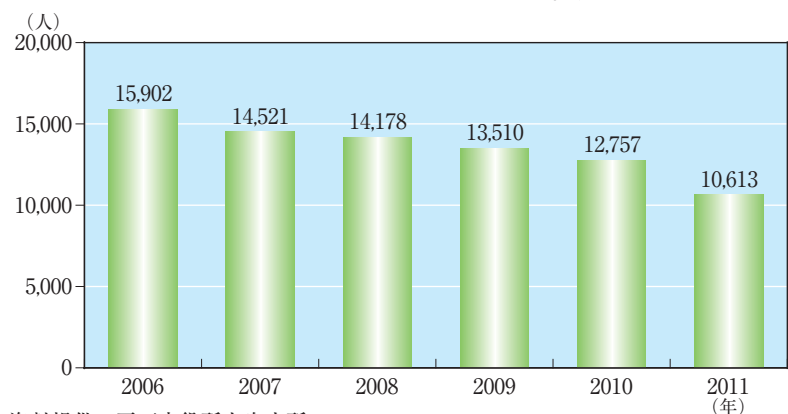
的山大島におけるこのような取組みは対外的にも知られるようになり、2013年1月には地方の疲弊をはね返そうと取り組む団体を支援することを目的に、全国の地方新聞社と共同通信社が合同で2010年度から設けている「地域再生大賞」の第3回大会で、優秀賞を受賞するにいたっている。

Ⅲ. 地域活性化の取組み

1. 歴史的景観を生かした取組み

たからもんの会では重伝建の選定を生かすべく、2009年に「九州町並みゼミ」の第3回大会を誘致した。これは、文化財や町並み保存のための調査や運動で知られる建築学者・前野まさる氏が理事長を務める「NPO法人全国町並み保存連盟」が、歴史的町並みの保存意義について理解を深め、地域の歴史文化を見直すきっかけを提供するため1978年から毎年開催している「全国町並みゼミ」の九州版であり、町並み保存の気運を盛り上げた。その他、神社の祭りに合わせて町並みにミニランタンを飾り、町歩きしながらのクイズ大会、古い町家の修復事業への協力など、民間レベルでできるさまざまな取組みを展開している。そもそも、2年間にわたり行われた文化庁の神浦へ

図表2 平戸市大島村地区における観光客の推移



資料提供：平戸市役所大島支所

の学術調査に、積極的に協力したのはたからもんの会であった。

島への観光客数は減少傾向にあるが【図表2】、たからもんの会による諸活動もあり、島内で最も規模が大きい公共宿泊施設「漁火館」^{いさりびかん}の近年の宿泊客数をみると、2011年度は対前年比14.6%の増加、2012年度も前年度を上回り推移している。また、漁火館が独自で2010、2011両年度に行った目的別宿泊客調査では、2011年度は対前年比で「仕事」目的が4.5ポイント増に対し、「観光」目的も3.5ポイント増加しており、重伝建の効果があがえる。

2. 島の環境を生かした取組み

的山大島では、花粉症患者を受け入れる『セラピーツアー』への取組みも行われている。このことに着目したきっかけは2006年、神浦の調査のため島に通い始めた花粉症の元九州造形短期大学教授・小西龍三郎氏（「NPO法人文化財匠塾」事務局長）が「的山大島に来る度に何故か鼻づまりがよくなる」ことに気付き、そのうえ、同年同島を訪れた花粉症の修学旅行生が「翌日は薬を飲まず快適に過ごすことができた」との感想を口にしていたことにはじまる【図表3】。

図表3 『避粉地』を生かした取組み

年、年度	内 容
2006	<ul style="list-style-type: none"> ・NPO法人文化財匠塾の事務局長で花粉症の小西氏が「的山大島に来る度に何故か鼻づまりがよくなる」ことに気づく。 ・島を訪れていた花粉症の修学旅行生が「翌日は薬を飲まず快適に過ごすことができた」との感想を口にしていた。
2007	<ul style="list-style-type: none"> ・小西事務局長の助言により、たからもんの会が1月からスギ花粉の観測を開始。福岡の専門機関に分析してもらったところ、的山大島の花粉飛散量は極めて少ない事が判明。 ・たからもんの会がTV取材を絡めたモニターツアー（5名）を実施。来島したゴーグルとマスク着用の花粉尘重症患者がその両方を取り外すのを見て、疑いが確信に変わる。
2008	<ul style="list-style-type: none"> ・長崎大学付属病院耳鼻咽喉科の高崎先生の協力を得て、島内におけるスギ・ヒノキの分布状況等について現地調査。結果、スギの分布面積の島内に占める割合は約1.7%（長崎県全体では42%）しかないことが判明。花粉症講座を実施。 ・2回目の避粉地体験モニターツアー（7名）を実施（以降、避粉地の取組みはNPO法人文化財匠塾平戸支部との共同取組みとなる）。
2009	<ul style="list-style-type: none"> ・高崎先生の指導のもと花粉症島民アンケートを実施。結果、97.4%の島民に花粉症の症状がなく、住民の92.3%の食事が和食中心であることが判明。 ・平戸市商工会の事業に参画、同女性部により花粉症対策メニュー「野の花弁当」を創作。 ・長崎大学が花粉分析協力。 ・3回目の避粉地体験モニターツアー（7名）を実施。
2010	<ul style="list-style-type: none"> ・4回目の避粉地体験モニターツアーを、平戸市商工会の地域資源全国展開プロジェクト事業「避粉地と重伝建の大島観光開発プロジェクト」として実施。福岡を中心とした60代以上の夫婦15名が参加（定員15名に応募者多数）。
2011	<ul style="list-style-type: none"> ・5回目となる避粉地体験ツアーを、長崎県委託事業『しまの産業活性化チャレンジ支援事業』のなかで「スギ花粉避粉体験セラピーツアー」として実施。80名の応募のなかから厳選された東京13名、福岡7名の計20名が来島。 ・平戸市補助事業による6回目のセラピーツアーを実施。

花粉症リフレッシュ!! 長崎県平戸市

大島セラピーツアー

おおしま

“大島”ってどんなところ?

九州の北西部、長崎県平戸市の北に位置し、平戸港から45分の、距離39km、人口1,500人の風光明媚な島です。

ツアー実施日 平成24年2月24日(金)～26日(日)

ツアー滞在地 長崎県平戸市大島村内

ツアー募集人員 花粉症患者20名(同行者限定5名含む)
 ■東京地区 10名 ■福岡地区 5名 ■同行者 5名

ツアー募集期間 平成23年12月1日(木)～12月25日(日)※先着順

ツアー費用 東京地区参加者・長崎空港までの往復交通費 便指定(空通から/スズノ)

福岡地区参加者・平戸港までの往復交通費
 ※平戸～大島フェリー運賃、2泊3日の宿泊費・食費・島内交通費等は主催者が負担いたします。

行程スケジュールは裏面をご覧ください

主催 特定非営利活動法人文化財匠塾平戸支部 協力 平戸市商工会・平戸観光協会

第5回目のセラピーツアーチラシ

また、前述した漁火館における目的別宿泊客調査では、2011年度は対前年比で「避粉」目的も1.4ポイント増加している。

IV. 今後の課題

1. 神浦の町並みの維持・管理と町家の活用

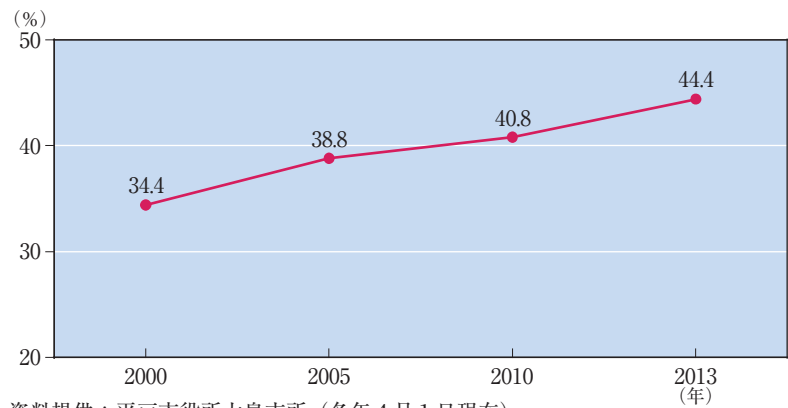
重伝建に選定された神浦の町並みだが、その町家280軒のうち約4割が空き家となっており、その維持・管理が重要な課題となっている。現在はたからもんの会や神浦町並み保存会の手によって維持できているものの「自分達も島で若手とはいえ40代後半である。現在も急速に進行している島の高齢化【図表4】を考えると、30年後はどうなるのか全く予想がつかない」とたからもんの会の丸田会長も心配している。少子

高齢化を食い止めることはかなり難しく、現状の民間頼みのままでは近い将来限界が来ることも考えられることから、日本の資産でもある神浦の景観は今後、平戸市など“公”の強力なバックアップが必要となってくるだろう。

また、現在は町並み散策がメインとなっており、空き家も多い「町家」が活かされているとは言い難い状況にある。このため、空いている「町家」を利用した飲食や土産販売など、観光客の楽しみを増やす仕組みも今後は考える必要もあろう。

一方、もともと当地の町家に面した街路は石畳で、その独特の景観にマッチしていたものを、1970～80年代に自動車の通行に支障があるとして撤去し、アスファルト舗装とした経緯がある。町並みのさらなる魅力アップのためにも、石畳街路の復活に加え、現状でもかなり目立つ電柱・電線の早期地中化が待たれる。

図表4 的山大島の高齢化率



資料提供：平戸市役所大島支所（各年4月1日現在）



藩政時代からと推定されている石畳街路（案内リーフレットより）

2. 他の避粉地との競合

この的山大島以外で花粉が飛ばない地域として花粉症患者にアピールしているところに「北海道」と「沖縄」がある。「北海道」では釧路市で宿泊のみ10万円で1カ月間の滞在が可能という破格の価格で集客、また「沖縄」では短・長期滞在用のコンドミニアム形式のホテルなどが花粉症患者で8割以上が満室になるという。ただでさえ集客力抜群のこの2大観光地に的山大島が『避粉地』として割って入っていくことは容易ではないが、たからもんの会の丸田会長は「両地域とも同じ『避粉地』として共存共栄を考えているが、まず北海道は“寒い”。沖縄は同じ島でも“南国の雰囲気がある島”で、的山大島とは全く異なると思う」とのことであった。

的山大島には日本の古い家屋が現存しており、上記2つの地域とは雰囲気が全く異なることをアピールすることは可能であると思われ、他の避粉地との差別化という点においても重伝建「神浦の町並み」が生きてこよう。

3. 観光客受け入れ体制の整備

的山大島では観光客の受け体制がまだ充分とは言い難い。例えば、神浦で町並み散策をする際にも、重伝建の説明版はあるものの、目の前の町家がいつの時代に建てられたのか、最も年代が古いのはどの町家なのか、なかを見学できる町家はどれなのかなどがさっぱりわからず、「町家」の良さがいまひとつ伝わりにくい。神浦は地元住民の生活の場でもあることから、観光客は目の前の町家がどのような歴史を持つ建物なのかなどについて、そこに住んでいる人にさすがに直接尋ねるわけにもいかず、ましてや勝手に他人の家（＝町家）を覗くわけにもいかない。そこで、特徴のある町家には説明版を作成することや、なかを見学できる町家の前にはその旨の案内を記すなど、石畳街路の復活や電線の地中化・移設とも相まって、より一層ハード面での整備が必要である。

一方、ソフト面では島内を案内するガイド体制を整備しておく必要がある。現在は都合がつく範囲内でたからもんの会のメンバーが無償で行っているが、訪れる側からみると、都合によりガイドできるかできないかわからないような状態であれば不便に映る。ここは島をよく知る地元住民などの力を借りてガイド体制を構築しておくことも肝要であろう。

もう1つソフト面で充実を図るべきものとして、観光情報の詳細な収集が挙げられる。観光客の動線や町並み散策を行った人の数などのデータを集めることにより、前年との比較などから今後の地域振興に生かすことが可能となる。

4. 宿泊施設の整備

島内の宿泊施設は、前述した公共宿泊施設「漁火館」の他に旅館1軒と民宿2軒の計4軒しかなく、丸田会長によると島内宿泊は70名程度が限界（漁火館は大広間があるため、団体なら100人以上は宿泊可能であるが）とのことであった。

これでは、重伝建の町並みと避粉地とで観光客を増加させようと活動しているなか、あまりにも宿泊のキャパシティが小さい（特に花粉症患者の方は長期滞在が期待できる）。たからもんの会では修学旅行生が利用している民泊の活用も考えており、また、県内では小値賀町で先行している古民家を利用した宿泊施設のように、空き家対策を兼ねて空き家を宿泊施設に作り替えていくことも検討されている。

5. 高齢者の協力

現在、島の数少ない若手（といっても40代）有志が、人口減が続く島の振興に奮闘しているものの、彼らは今が最も働き盛りであり、自分たちの生活も支えなければならない現実がある（島への誘客事業だけでは食べていけない）ため、どうしても時間的制約に縛られる場面が出てくる。

そうしたときに、丸田会長の「この島は若年層が少ないことに加え、高齢者は上の年齢層が多く、65～75歳といった、いわゆる高齢者のなかでも若い層が少ない」との言葉からも、島に住む多くの高齢者の方々の協力を得られることが、今後の的山大島振興のキーポイントとなろう。

島には修学旅行の民泊受け入れ知識があり、経験を有する家庭も多数存在している。人口が1,200人台となるなか、元気な高齢者の方々には、年齢を問わず土産物の販売員や景勝地の清掃、ガイドへの参加など、是非積極的に島の振興活動に関わり、充実した毎日を過ごしてもらうことが望まれる。



景勝地：大賀断崖（提供：平戸市役所大島支所）



的山大島の棚田

6. 市の離島に対する理解と支援

平戸市への観光客は、そのほとんどが平戸島止まりであり、そこから先にはなかなか足を伸ばさない。平戸島にあるオランダ関連遺跡や城郭などで訪れる目的が完結してしまっており、的山大島まで足を伸ばすにはストーリー的に厳しいものがある。平戸市内の他地域には、世界遺産の登録を目指している教会など、観光客が目を向けやすい素材が数多くあることから、そこからさらに同じ市内とはいえ、観光客の目を離島の的山大島にまで向けさせるには相応の情報発信が必要となる。島民では金銭的に難しい情報発信については、神浦の町並みの維持・管理と同様、これまで以上に平戸市によるバックアップが必須であろう。

おわりに

的山大島へのアクセスは、長崎県内からみると日帰りも何とか可能な、離島のなかでは比較的短時間で行くことができる場所であるが、県外目線で見ると、五島列島や壱岐・対馬のように博多港からの直行便がなく、長崎県・平戸島まで行き、そこからさらにフェリーへ乗船、という心理的距離の影響の大きさが容易に想像できる。

県外からの誘客にはこの距離感を埋めることのできる魅力を発信しなければならないが、その点、『重伝建の町並み』と『避粉地』という他地域にはない地域資源に加え民間団体『あづち大島たからんもんの会』の活動がマスコミに採り上げられている現在は、的山大島の振興が大きく飛躍するチャンスでもある。まだ多くの課題も残されているが、島民主導の活動に強力な行政のバックアップが加わることで、離島振興における官民連携の手本となることを期待したい。

(杉本 士郎)